OISO MUNICIPAL MUSEUM

Report リポート

大磯町郷土資料館だより

1993・9・30

8

もくじ

◇初代竹春展 2
◇漂泊の人々 4
◇自然観察会報告 8
◇トピックス／資料の受入／行事案内 10

開館５周年記念特別展

「初代　竹春展」

大磯町郷土資料館では、平成５年10月17日から11月21日まで、開館５周年を記念して、「初代竹春展」を開催いたします。

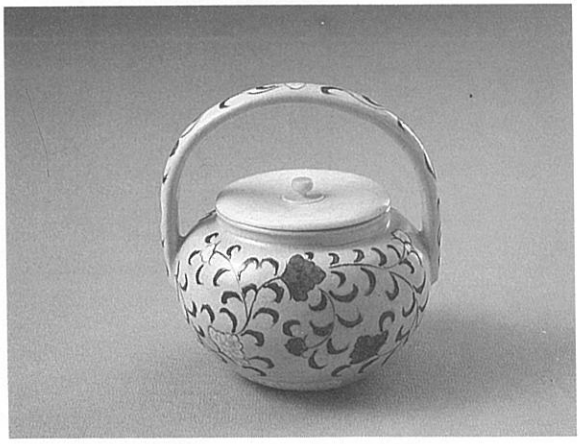
初代川瀬竹春氏は、明治27（1894）年、岐阜県大垣市郊外の福束村（現、安八郡輪之内町）に生まれ、14歳にして陶芸の道に入り、瀬戸、京都、大垣、大磯と活発な活動を展開しました。昭和19（1944）年には国から技術保存者の指定を、更に昭和30（1955）年には無形文化財として記録作家の選択を受けるなど、特に半世紀にわたる中国彩磁の祥瑞の研究に高い評価を得ています。

大磯町には、昭和24（1949）年から同28（1953）年まで三井財閥総本家の別荘であった城山荘（現、県立大磯城山公園）の一角に築かれていた城山窯で陶芸活動をされていたことが知られています。その後、活動の中心は大垣に移りましたが、昭和52（1977）年再び大磯町に居を移されました。そして、翌年には「お近づきのしるし」にと瑠璃祥瑞葡萄文壺を大磯町に寄贈されています。これは、皇居新宮殿石橋の間に飾られた作品と一緒につくられた姉妹作品で、現在は当館で保管しており、毎年開催する収蔵品展（逸品展）に展示し、一般公開しています。

今回、川瀬家現当主の順一氏（二代竹春）、ご令息忍氏、竹志氏の多大なお骨折りで、待望の特別展を開催できるはこびとなりました。どうかたくさんの方々にすばらしい作品の数々をご鑑賞いただきたいと思います。

昭和32年元旦、自宅にて

なお、会期中には、東京国立博物館陶磁室長の矢部良明氏による「初代川瀬竹春と中国陶磁」と題した記念講演会を開催いたしますので、ふるってご参加ください。



（上）赤絵草花文茶器
（左）赤絵獅子五角香炉

初代川瀬竹春年譜

年号（西暦）	年齢	事　　項
明治27(1894)		4月27日出生、本名五作
40(1907)	13	愛知県瀬戸にて陶器修業に入る
43(1910)	16	京都で三代清風与平に指導を受
大正4(1915)	21	二代三浦竹泉に師事する。
8(1919)	25	独立し、南日吉町で開窯する。
昭和2(1927)	33	大和大路五条下ルへ移る。
6(1931)	37	五条坂へ移る。
16(1941)	47	中国、杭州へ陶磁器研究視察。上海にて個展開催。
19(1944)	50	国から技術保存者に指定される
24(1949)	55	大磯町の城山窯にて作陶する。
昭和28(1953)	59	大磯町国府本郷に移る。
30(1955)	61	国から無形文化財として記録作家の選択を受ける。
35(1960)	66	皇居仮宮殿へ祥瑞香合納入。長男順一に大磯の窯を託す。
41(1966)	72	紫綬褒章受賞。
44(1969)	75	大垣市より無形文化財に認定。
45(1970)	76	勲四等瑞宝賞受賞。新宮殿石橋の間に瑠璃祥瑞花生を納入。
46(1971)	77	下田御用邸に緑釉花生を納入。
50(1975)	81	大垣市より文化功労章受賞。
54(1979)	85	竹春を長男順一に譲り竹翁と号す
58(1983)	89	8月9日、大磯にて永眠。

特別展出品一覧

	名　　称	（法　量）
1	瑠璃祥瑞花瓶	(32.6)
2	染付蝶図花瓶	(55.0)
3	赤絵人物図花瓶	(49.3)
4	赤絵龍文花生	(29.0)
5	緑釉角瓢形花生	(25.0)
6	緑釉象耳花生	(36.0)
7	黄釉四方花生	(27.0)
8	青地スカシ花鳥金襴手盛盞瓶	(28.8)
9	染付砂金袋花入	(16.0)
10	染付櫂の図水指	(19.8)
11	赤絵花鳥水指	(13.5)
12	祥瑞松竹梅蜜柑水指	(17.0)
13	赤絵玉取り獅子鉢	(21.0)
14	染付櫂の図水指	(39.0)
15	赤絵草花文茶器	(10.0)
16	色絵茶器	(8.0)
17	染付松竹梅図火入	(8.6)
18	祥瑞筒茶碗	(9.0)
19	赤絵椿図茶碗	(9.0)
20	城山窯茶碗（志野）	(6.5)
21	城山窯茶碗（井戸）	(7.2)
22	祥瑞振出し	(8.5)
23	祥瑞振出し	(8.5)
24	赤絵獅子五角香炉	(13.0)
25	緑釉菊蟹香合	(5.6)
26	祥瑞蜜柑香合	(5.3)
27	染付辻堂香合	(6.4)
28	赤絵糸巻香合	(2.1)
29	赤絵獅子五角香炉	(13.0)
30	祥瑞針木皿	(26.0)
31	色絵祥瑞瓢形徳利	(19.5)
32	瑠璃祥瑞瓢形徳利	(19.5)
33	赤絵人物図盃	(4.0)
34	祥瑞升形盃	(4.8)
35	祥瑞盃	(5.2)
36	祥瑞瓢形徳利	(20.2)
37	城山窯六角盃（黄瀬戸）	(5.2)
38	黄釉盃	(2.7)
39	緑釉盃	(2.8)
40	城山窯徳利（黄瀬戸）	(13.5)
41	城山窯盃	(4.6)
42	城山窯盃（黒釉）	(3.4)
43	城山窯徳利（織部）	(12.3)
44	城山窯盃（唐津）	(4.7)
45	染付むぎわら　のぞき向附	(10.5)
46	赤絵蓋物	(14.0)
47	鉄絵鉢	(8.7)
48	赤絵寿皿	(46.0)

＊法量のうち皿は口径、他の器種は高さを表示。単位はcm

漂泊の人々　－大磯を訪れた聖人たち－

1．はじめに

中世以降、街道の整備とともに宿場として発展してきた大磯とその周辺の村々には、さまざまな人の往来があった。今日まで育まれてきた大磯特有の経済活動や文化にとっても、彼らの果たした役割は決して少なくない。ところで、そのような人々の中には、定まった居をもたない漂泊の旅を続ける者も多かった。そして、村人と漂泊の人々との間には、さまざまな交渉の跡が窺える。その意味するところは、彼らが単に通り過ぎていくだけの存在ではなく、村人たちにとっても特別な意識をもって接する対象でもあったことに他ならない。それは、時として彼らが吉凶を占ったり、村人に幸をもたらしたりするなど、特別な力を持つ人々として把えられていたことに起因する。ここでは、大磯町に残る数多くの痕跡のなかから顕著な事例を紹介してみたい。

2．リュウグンマチ

1月10日の晩、南下町、北下町、長者町などに住む漁民たちにより、リュウグ(ゴ)ンマチ(龍宮祭)と呼ばれる講がおこなわれている。リュウグンサンというのは八大龍王ともいい、漁民たちから厚く信仰されている漁の神である。当日は、ヤド(宿)と呼ばれる当番の家に漁民たちが寄り集まり、掛軸とオタマシ(ご神体)に向かって木遣唄をあげ、そして、共に飲食をしながら1年の大漁を祈るのだが、このとき必ず豆腐汁を食べることが慣例となっている。ところで、なぜ豆腐を食べるのだろうか。その由来については、若狭の小浜から伝わったものとして次の話が語られている。[1]

毎年、漁師仲間が集まってリュウグンサンのオヒマチの講をしていたが、今年は1名足らなくて困っていた。そこへ身なりのたいへん悪い人が訪ねてきて、頭かずが足りないのなら自分を入れてくれるように頼んだところ、漁師たちは皆喜んで迎えたという。そして講が無事に終わると、その人は、来年はぜひ自分の家に来てくれるように告げて帰っていったという。1年がたった。約束どおり使いの者が迎えにきたので、皆がついて行くと村はずれの淋しいところまできた。すると、あたりが急に明るくなり、御殿のような建物が見えてきた。案内された家のなかがあまりにも美しいのに目を見張るばかりだったが、長い廊下を通るときたいへんなものを見てしまった。それは人間を料理しているところだった。漁師たちは驚いて逃げ出したがそのとき家人が切身を投げ付けたので、1人の背中にくっ付いてしまったという。切身が付いていることを知らずに逃げ帰った男には1人の娘がいた。父親を出迎えた娘は、背中に付いていた肉の切身を見つけて食べてしまった。その後、娘は800歳も長生きし八百比丘尼と呼ばれたという。娘の食べた切身は人魚の肉だったといわれ、それでこの日には人魚の肉によく似た豆腐を食べるようになったという。

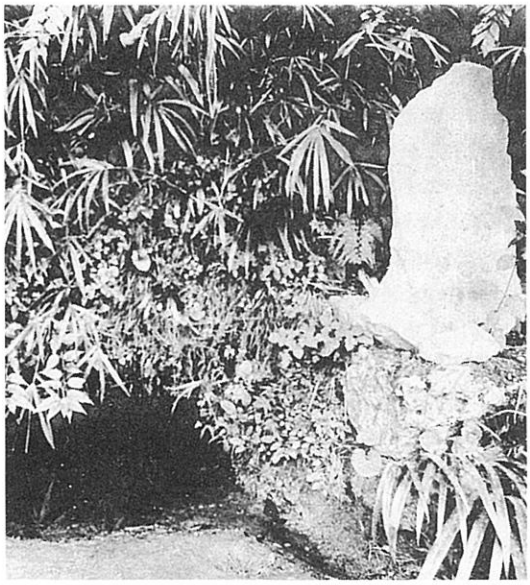
リュウグンマチ

ところで、一般的に知られている八百比丘尼の話では、人魚の肉を食べた娘は歳をとることなく不老長寿の身となったが、120歳で剃髪して尼となって全国を行脚し、800歳で洞窟に入定したことになっており、むしろ現世の移り変わりのはかなさを伝えるものとなっている。しかし、大磯に伝わる話では、長寿という幸を得た点に重きが置かれており、見知らぬ旅人を歓待したことによって、幸を得るという内容になっている。そして、話の中にある「身なりのわるい」という表現は、おそらく漂泊の旅人であったろうことは想像に難くない。さらに、この人がリュウグンサンの化身であったのか、あるいは使いの者であったのかは分からないが、少なくともリュウグンサンとの関わりに大きな役

割を持っていたことに違いはなさそうである。話の中では漁師のうちの誰の娘が800歳という長寿を得たのか、その特定はなされていない。しかし、現在でも、リュウグンマチのヤドをすると、その家では１年間は必ず漁があると言われており、つまり、漂泊の民を歓待した家の者が幸運を授かるという、より具体的な観念が見えてくるのである。

３．僧と六部

八百比丘尼がそうであったように、諸国を巡る修行僧の話も多い。大磯においては、古くは弘法大師や徳本上人の話が残っている。西小磯では、旅僧姿の弘法大師が１杯の水を乞うたが断られたため、以後この地は水に不自由するようになってしまったという話や、逆に施しを与えたため、その礼として、大師が杖で地面を突くと、そこから渾々と水が湧き出て池となったと伝える場所もある。また、徳本上人の足跡は史実としても残っており、徳本念仏あるいは大会念仏と呼ばれる講も組織されるなど、現在も多くの人々に厚く慕われている。なお、修行僧のなかには、各地にある村持ちの堂宇や無住の寺などに滞在し、あるいは住みつくこともままあったようである。大磯町内でも漂泊の末に大磯へ居着いた修行僧らしき話が語られており、村人たちから大きな信頼を得る者も少なくなかった。村人のなかには生まれた子の名前をすべてつけてもらったという家もある。



弘法大師の力で湧いたとも伝える「十郎の硯水」

また、六部というのは、六十六部の略で、66か国の社寺に法華経を納めるために巡礼する人のことで、特に近世において顕著にみられたようだ。六部は必ずしも修行僧とは限らないようであるが、大磯にもかなり訪れていたことは聞き取りからも明らかである。山王町に住むＳ家は、南下町に本家を持つ旧家であるが、もともとはＫという姓を名乗っていたという。ところが、あるとき六部が訪れ、感化された当主が、とうとう六部の子となってしまい、六部のＳ姓を名乗るようになったと伝えている。確かに当時の当主は信心深く世話好きだったようだが、永く続いてきた姓を改めるのは、決して容易にできるものではない。それだけに漂泊の旅を続けてきた六部を聖視するところが大きかったに違いない。

４．オイチと厄祓い

かつては、大晦日年越し（12月31日）や六日年越し（１月６日）になると必ず厄祓いが来たという。西小磯の古老によれば、[2] 明治の末頃に西小磯では６つか７つぐらいの子どもで「オイチ」と呼ばれる厄祓いがきた。どこからやってきたのか分からないが、オイチは西小磯の「高平の穴」と呼ばれる場所におじいさんと２人で住むようになったという。「高平の穴」とは大磯町西小磯の字高平にある横穴墓群のひとつで、そこを拠点に、おじいさんは農家などで使う藤蔓で編んだ「箕」を修理することで生計をたてており、オイチはその注文をとって歩いていたようである。そして、年越し日の晩方になると厄祓いに歩いた。

『メデタイナ、メデタイナ、オオミソカドシコシノゴシュウジツ、ダンナ、オヤクヲハライマショ、メデタキコトニテハライマショ、メデタキコトニテハラウナラ、ウオヅクシニテハライマショ、ウオヅクシニテハラウナラ、イチニシュッセハモロノウエ、ニデニッコリヒメコダイ、サンデサゴチエ、シデシラホウノゴカナイサマ、ゴデゴマメデオメデトウ』

と唱えながら１軒１軒まわり、僅かな祝儀をもらい受けながら歩いたという。なお、話者はオイチと同じぐらいの年令だったこともあり、子守をしながら、よくオイチの後をついて回ったという。オイチは話者が10歳ぐらいまで厄祓いにまわっていたようだが、その後再びどこかへ行ってしまった。しかし、南本町に住んでいる古老の話によれば、[3] 話者の父親が道了尊の参道で、大磯に出入りしていた「箕なおし」を見たといい、さらに小田原ではオイチを見かけたという。この話中の「箕なおし」というのはオイチのおじいさん

のことかと思われるが、つまり、オイチやおじいさんは西小磯の家々だけでなく、大磯全般にわたってかなり広範囲に活動していたことや、オイチが最終的に小田原に居を定め、魚屋を始めて成功したらしいことなどが分かる。それはともかくも、オイチや彼のおじいさんのような漂泊の民が厄祓いなどの祝儀に関する儀礼に関わりを持っていたことを知ることができる。

もちろん、このような活動をしたのは決してオイチだけではなかった。やはり六日年越しの早朝には必ずどこからか行者がきたという。[4] 行者はまだ寝静まっているころから『桶ダシタリヤ、水ダシタリヤ』と大声でふれて歩いた。すると各家で桶に水をはって門口に出しておく。そして、行者は再び同じように叫びながら1軒1軒水をかぶって歩いたという。年越しにあたり、身に溜まった穢れを行者が村人に代わって洗い流すという意義があったのだろう。それゆえ各家では行者の呼び掛けに応じ、さらにいかほどかの施しを与えたのである。

時代は下るが、「大磯町広報第10号」（昭和29年3月10日発行）には、大雪の日に行き倒れていた人を、大磯小学校の生徒2名がリヤカーで「コウヘイの穴」へ送り届けた善行話が掲載されている。オイチが住んでいたという「高平の穴」は、その後も漂泊の民と村人たちとの交渉の拠点となっていたことを裏付ける内容である。

高平の穴

5．王福寺の禅林地蔵

大磯町寺坂にある王福寺は、寺伝によれば神亀2年（725）に行基が開いたとする古刹である。特に、この寺の本尊である薬師如来坐像は、東国における藤原時代初期の代表的な作例として国の重要文化財に指定されていることで知られている。しかし、その本尊が安置されている文化財保存庫と本堂との狭間に、禅林地蔵という一体の石地蔵が立っていることを知る人は少ない。この地蔵は昭和58年に造立された比較的新しいものであるが、この地蔵の造立までの経緯には次のような話がある。[5]

戦後間もない頃の4月、ちょうど八坂神社の祭礼の日に、あるオモライサンが王福寺を訪れた。汚れた外套を着て、帽子をかぶり、軍服のような服の胸には万年筆や鉛筆をいっぱい挿し、たくさんの荷物を抱えた大柄な男だった。その頃は、まだ物不足の時代だったが、たまたま残っていたわずかばかりの食べ物を分け与えたという。ところが、それが余程うれしかったのか、その後たびたび顔をみせるようになった。たびたびといっても年に2～3回だったようであるが、いつも境内に入って来るなり、『元気かー』と叫びながらやって来るのが常だったという。ところで、彼は1軒1軒すべての家を訪ね歩いたわけではなく、いつも決まった家にしか寄らなかった。しかも、欲が無く不必要な施しは受けなかった。また、人の気持ちを見抜く目は鋭かったといい、形だけの善行には愛想はなく、かえって酷評の対象としてしまったという。したがって、気に入った家にしか寄らなかったのである。その後、彼の訪問は30年近く毎年続いたが、昭和58年に平塚市徳延の徳延神社の拝殿で動けなくなったところを市職員に保護され、病院に担ぎこまれたという。しかし、身寄りがあるでもなく、年齢もはっきりせず、過去についても一切口を閉ざしたままだった。[6] わずかに彼は王福寺に預けたいものがあるから呼び出して欲しい旨を口にしたという。連絡を受けた王福寺では、やはり彼がよく訪ねる家と一緒に早速駆け付けたそうである。すると、彼はありとあらゆるところから所持金を取出して、お薬師さんへあげてくれと言って札や小銭を手渡した。それらは長年しまっていたままで変色し悪臭を放っており、金額を数えるのにも苦労したようだが、驚いたことに無造作に出したはずの所持金の額がちょうど777,777円であったという。彼の切望どおり、金は王福寺が一旦持ち帰って薬師の仏前にあげられた。そして、本来ならばその所持金は入院費用等に充てられるべきであろうが、どうしても彼の気持

ちを無視することができず、民生委員や市職員の理解を得て、結局その金で地蔵を造立することとなったのである。この所持金の額をどう思うかはともかくとして、彼には他にもいくつかの特殊な言動があった。彼は歴史について特に詳しく、機嫌がいいと歴史の話を得々と話した。また、うたを詠むなどの文才もあったという。ちょうど、漂泊の俳人であった種田山頭火を彷彿とさせるが、彼の立ち寄った家では、いくつかのうたが書き留められている。

『房につく　咲いて見事な　花の数』

『咲きまさる　つけて見事な　牡丹かな』

『東名の　走る暇無し　どこへ去る』

『牛の餌　もろ（ら）う旨さの　モウの子よ』

しかし、彼にはさらに別な能力もあったようである。それは天候や作柄についての予見をすることである。例えば、「今年はイネを早く植えろ」「今年はゆっくり植えた方がいい」「今年はワセの方がいい」「今年はオクがいい」「○○をつくれ」「○○はよせ」などと話すことがあり、この予見はかなり信頼できるものでもあったという。また、こんなこともあった。あるとき、王福寺へ神がかったような人がお参りにきたことがあった。自分にはキツネがたくさん憑いており、お薬師さんと話ができるのだという。その人が言うには、寺には池があるのになぜ弁天を祀らないのか、すぐにでも祀らなければだめだという。まもなく彼が来たので、その話をしたところ、とんでもないと逆にきつく止められてしまったという。また、王福寺の檀家総代を務めている家へも来て、檀家からも弁天をつくらないように進言するよう、たいへんなけんまくで話していったという。こうしてみると先の所持金の額も単なる偶然ではなく、やはり聖人の為せる業と思いたくなってしまう。彼に関わった人々にとっても、そう思うのは十分理解できることである。それが地蔵の造立へつながっていくのは、至極当然のような感じがする。

6．おわりに

これまで紹介した話にはいずれも共通した要素がある。それは言うまでもなく、村の外からやってきた漂泊の人々に施しを与えた見返りとして、彼らから何らかの恩恵を受けているということである。彼らは、いわば都市や農村において定住することができない、あるいは自らが定住することを拒否した人々であり、また、ある意味では社会から排除された人々でもある。しかし、排除されたといっても、村人たちは訪問者としての彼らを拒否しているわけではない。むしろ村外の情報を提供し、村人に代わって潔斎をし、あるいは幸をもたらしてくれる者として聖視し、心待ちにしていたふしさえ感じられる。そして何よりも、これら特殊な能力をもった漂泊の人々は、お伽話などに教訓として残存するだけでなく、ごく近い過去にも数多くみることができたこと、そして、おそらく現在も存在していながら、ただ我々が気付かなくなりつつあるだけではないかという思いを抱かせる話である。

禅林地蔵

（当館　佐川和裕）

－註－

① 山下春吉氏（故・明治36年生）の手記、および阿部川益吉氏（大正５年生）の話による。

② 鈴木ハナ氏（故・明治35年生）の話による。

③ 宮代フク氏（明治33年生）の話による。

④ ②に同じ。

⑤ 湯口正巌氏（故・明治41年生）、湯口智恵子氏（大正２年生）、杉崎武氏（故・明治40年生）、杉崎タキ氏（明治41年生）の話による。

⑥ その後、東京の大森出身で、当時（昭和58年）73歳、石田吉雄という名前であることを話されたという。禅林地蔵には、施主として石田氏の名が刻まれている。

＊ なお、数多くの貴重なお話をお聞かせくださった方々に対し、心よりお礼申し上げます。

自然観察会報告

9月12日、自然観察会を行った。自然観察会は、当町郷土資料館ではもう何度も行っていることだが、私が企画し、実施するのは初めての経験である。何事も最初は、不安が付きまとうものだが、私自身も例外ではなく、特に参加者を募るときは、全く人が集まってくれないのではないかと心配もした。結局、観察会の当日は、適度に人数も集まり、無事事故もなく終了したのだが、企画の面でみると、いくつかの課題を残す結果となった。

今回のテーマは、表向きは、大磯にすむ昆虫の生態観察ということにした。しかし、私自身の意図では、昆虫に限らず普段、生活する上で、あまり気にかけない自然に注目し、地球上の生態系の中には人間だけが生きているのではなく、昆虫や動物、植物も生きているのだと再確認してもらうことだった。そこで題目は、「家から外へ一歩足を運んでみよう」。家から外へ一歩足を運んでみると、実は我々があまり気にかけないところに昆虫や動物、植物の生活があるそのことに気付いていただけたらと思ったのである。

観察会当日は、あいにくの雨。スケジュール通りに進行するには難しいように思えた。参加者は、小学生10名、保護者を含め大人が5名、それに大学の博物館実習の期間ということもあって実習生が7名、計22名であった。講師には、私の大学時代の先輩で、現在でも昆虫の生態観察をはじめとし、昆虫の遺伝学的な研究を手掛けておられる川上　裕司さんにお願いした。

雨の影響で一部予定を変更することになったが、一往の観察会の進行は次に示す通りである。

1．挨拶、趣旨説明　（9：10～9：20）
自然観察会は、あくまで生物の生態観察であって、昆虫採集、植物採集とは目的が異なる。
（観察会と採集の分離）

2．観察の要点と心構え　（9：20～10：20）
生物は、分類を行う際に、門、綱、目、科、属、種というふうに分けられるが、そのうち目を分類するのが重要であること。同じ場所を見ても季節によって昆虫の移り変わりがあること。自然のしくみ、人と自然のあり方など。（スライドにより説明）

3．野外観察　（10：30～11：45）
県立大磯城山公園の昆虫を観察
（公園内にすんでいる昆虫の生態観察）

4．昼食（県立大磯城山公園もみじの広場休憩所）
（11：45～12：40）

5．県立大磯城山公園から神揃山へ移動
（12：45～13：00）

6．野外観察　（13：00～14：10）
神揃山の昆虫観察、昆虫のスケッチ
（バッタ、カマキリ、ナナフシなどの形態の観察）

7．神揃山から郷土資料館研修室へ移動
（14：10～14：40）

8．研修室で昆虫の生態に関するビデオを放映
（アリやハチの家族社会の様子）（14：45～15：45）

9．今回の自然観察会の反省、挨拶（15：45～15：50）

以上のような経過をたどったわけだが、今回の場合、前記した通り、時折雨が降ってきたこともあって、予定としていたタイムスケジュール通りには行うことが